

Title	高齢夫婦の精神的健康と認知機能に関する研究動向と展望
Author(s)	石岡, 良子
Citation	生老病死の行動科学. 16 p.47-p.54
Issue Date	2011
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23410
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

高齢夫婦の精神的健康と認知機能に関する研究動向と展望

A review and perspectives on mental health and cognitive function across older couples

(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程) 石岡良子

Abstract

Recently, studies have suggested the importance of understanding aging in a social context. Aging studies have focused on the relationships between married couples in old age. This review described the recent trend of international studies on spousal interrelations in old age, including such key domains as mental health and cognition. Japanese papers related to older couples were also reviewed. Then, future perspectives for studies of older Japanese couples were discussed.

Key word: older couples, spouse, interrelation, mental health, cognition

I はじめに

加齢や発達を理解する上で、社会文脈的な視点の重要性が指摘されている (Baltes & Carstensen, 1999)。高齢者研究では、親密な他者である配偶者の影響に注目が集まり、夫婦間の相互作用に関する研究が報告されつつある (Hoppmann & Gerstorf, 2009)。日本では男女の平均寿命が 80 年に及ぶため (厚生労働省, 2010)、60 歳で退職を迎えた夫婦はその後約 20 年間をともに暮らすことになる。長年ともに生活する中で、どのような影響がみられるのだろうか。本報では、日本における高齢夫婦の現状をまとめ、海外とわが国における高齢夫婦の研究を概観した。海外研究では高齢夫婦の精神的健康および認知機能を扱った研究を取り上げた。そして海外研究と比較してわが国の研究にどのような課題があるか整理し、今後の展望について述べた。

II 日本の高齢夫婦の現状

平成 22 年版の高齢社会白書 (内閣府, 2011) によると、平成 17 年における 65 歳以上の高齢者の未婚率は男性 2.4%、女性 3.5%、離別率は男性 2.8%、女性 3.9% である。近年では、別居や再婚など多様なライフコースを選択する高齢者も少なからずみられるが、長い間ともに生活し高齢期を迎える夫婦が最も多い。世帯については、子どもとの同居率が減少傾向にあるため、高齢夫婦のみの世帯数は増加傾向にある。同白書によると、65 歳以上の家族がいる世帯の内 29.7% (588 万世帯) は高齢夫婦のみの世帯である。夫婦関係については、高齢者の心の支えとなっている人として配偶者を選択した人は 64% (複数回答)、夫婦関係が満足と回答した高齢者は 84.4% であり、高齢期の情緒的つながりにおいて配偶者が重要な位置

を占めていることがわかる。また、厚生労働省(2008)の報告によると、同居介護者が要介護者の配偶者である割合は25%と一番高く、その内の3分の2を女性が占めている。核家族化と平均寿命の延長を踏まえると、配偶者による介護は今後も増加すると予測される。

Ⅲ 高齢夫婦の相互作用に関する海外研究の概要

高齢夫婦は、長年ともに生活する中で、他の続柄とは質的に異なる親密な関係を築くと考えられる。高齢期を適応的に自立して過ごす上で精神的健康や認知機能は重要な要因であるが、夫婦間の相互作用を通して、これらの要因はどのように影響し合っているのだろうか。以下では、高齢夫婦の精神的健康および認知機能を扱った海外研究を紹介し、それらに関連する理論と高齢夫婦の概念的枠組みについて概観する。

Ⅲ-1 高齢夫婦の精神的健康と認知機能の関係

まず、夫婦間の精神的健康を扱った研究を紹介する。夫婦は親密な関係であり、情動的な経験も多い(Carstensen, Graff, Levenson, & Gottman, 1996)。高齢夫婦の精神的健康を検証した研究では、夫婦でその状態が類似すると報告されている。Tower & Kasl (1995; 1996)は高齢夫婦における抑うつについて横断的縦断的に検討し、配偶者の抑うつがもう一方の配偶者に影響し、その影響は親密性が高い場合により強いことを報告した。そしてHoppmann, Gerstorff, Willis, & Schaie (2011)は178組の35年に渡るデータを用いて夫婦における幸福感の軌跡について検証した。その結果、幸福感のレベルだけでなくその変化の仕方においても大きな類似性が確認された。Townsend, Miller, & Guo (2001)は横断データであるがマルチレベル分析を用い、教育歴、健康、年齢の個人レベルの要因と世帯収入や資産のペアレベルの要因を考慮した上で夫婦間の抑うつ症状を検討した。その結果、夫と妻の抑うつ症状は中程度の相関があり、さらに個人レベルの要因だけでなくペアレベルの要因も有意に関連すると報告した。認知機能についても、精神的健康と同様、夫婦間で類似する現象が報告されている。Gruber-Baldini, Schaie, & Willis (1995)は169組の夫婦を対象に様々な認知機能の縦断的变化を検証した。その結果、年齢と教育年数を統制した後も、14年に渡って夫婦間における知的能力の類似性が有意に高くなると報告した。これらの研究はメカニズムまでは検証していないが、ともに生活する中で精神的健康と認知機能の程度やそれらの変化が類似することを示している。

続いて、夫婦間の精神的健康と認知機能の関係を扱った研究を紹介する。Lee, Paddock, & Feeney (2011)は、2684組の高齢夫婦を対象に個人内と夫婦間において抑うつと認知機能との関係を検討した。抑うつから認知機能、あるいは認知機能から抑うつのように領域を横断して影響するかについても検討した。その結果、個人内の影響では抑うつと認知機能が2年後の各領域に影響することが確認されたが、妻においては抑うつが2年後の認知機能の低下を予測した。夫婦間の結果では、抑うつと認知機能は配偶者の2年後の抑うつと認知機能にそれぞれ影響することが示され、夫から妻に影響するよりも妻から夫に影響する方が強かった。また、夫婦間において領域を横断した影響は確認されなかった。このような性別

による影響力の違いは研究によって結果が異なっている。Lee et al. (2011)と同様、Gerstorf, Hoppmann, Kadlec, & McArdle (2009)は妻から夫に影響することを示した。Tower, Kasl, & Moritz (1997)においても、妻の認知機能の低さは夫の抑うつにネガティブな影響をもたらす、特に夫婦間の親密性が高い夫においてその影響が強かいことが報告された。一方、Peek Stimpson, Townsend, & Markides (2006)の結果では夫の抑うつ症状や人生満足感が妻の幸福感に影響を及ぼすと報告している。Strawbridge, Wallhagen, & Shema (2010)の研究においても、夫の認知機能に対する自己評価の低さは、夫婦関係に問題があると答えた妻においてのみ認知機能に対する5年後の自己評価が低くなると報告した。そして、夫婦間において領域を横断した影響がみられなかった理由について、妻の抑うつが夫の記憶の低下に影響することを示したGerstorf, Hoppmann, Anstey, & Luszcz (2009)との研究の違いから、対象者の平均年齢が若く、認知機能としてMMSEを測定したことを限界点として述べている。

Ⅲ -2 理論と概念的枠組み

次に上記の現象に関連する理論や高齢夫婦の特徴を抽出した概念的枠組みを紹介する。まず、夫婦間で精神的健康や認知機能が類似する現象について、情動伝染 (emotional contagion; Hatfield, Cacioppo, & Rapson, 1993)、共有環境 (shared environment; Tower & Kasl, 1996)、選択結婚 (assortative marriage; Eagles, Walker, Blackwood, Beattie, & Restall, 1987)の3つの理論が提案されている。情動伝染とは、笑っている人を見て自分も明るい気持ちになるなど、他者の感情を知覚することで、自分自身も同じ感情を経験する現象のことである。共有環境とは、情動に影響するような環境を共有しているためにそのような現象が起こると仮定している。そして選択結婚では、結婚する時点で情動や社会経済的特徴が類似した人に魅力を感じて結婚するため、夫婦で同程度の精神的健康や認知機能レベルになると説明している。これらの理論は着目している点は異なるが、いずれも妥当性のある理論と言える。選択結婚によって結婚当初からある程度精神的健康と認知機能に類似性があり、さらに生活をともにすることで同じ経験をしたり、相手の表情を知覚することでそれらの類似性は高まっていくと想定されるからである。

そして、夫婦間の影響における性差について、一貫した結果は得られていないが、夫から妻に影響する、あるいは妻から夫に影響するそれぞれの立場から説明が試みられている。夫から妻に影響する理由としては、妻にとってコミュニケーションは重要であり (Berg, Johnson, Meegan, & Strough, 2003)、女性は男性よりも社会的活動量が多く情動的であることを挙げている (Moen, 2001)。一方、妻から夫に影響する理由としては、夫は妻の幸福感に責任を感じているため、妻が抑うつ状態に陥ると夫は影響を受けやすいが、妻は自身の感情を効果的に表現できるため影響を受けにくいと推察している (Tower & Kasl, 1996)。

また、理論ではないが Hoppmann & Gerstorf (2009)は高齢夫婦を捉える4つの概念的枠組みを提案している。一つ目は、高齢夫婦にみられる相互依存的な発達獲得と喪失のダイナミクスをとまなうことである。これは、個人の発達を考える場合にも重要な視点であるが、夫婦間の発達的变化においても同様のことが指摘されている。配偶者はもう一方の配偶者の

発達を促進するだけでなく、妨害を伴うことも意味している。そして、相互作用による獲得と喪失は異なるメカニズムをもっており、1次元として扱うべきではないと述べている。二つ目は、夫婦関係は動的で特異的な特徴をもつことを挙げている。高齢期の夫婦関係はより親密で情緒的な意味を交換しようとするが、長い年月をともにする中で、標準的に経験することだけでなくその夫婦に特異的な出来事も経験する。たとえば、子どもを亡くした経験は特異的な経験に位置づけられる。三つ目は、与えられた機会や制限の中で自身の発達を形作ることである。夫婦関係は二人の文脈を考慮しなければ適切には理解できないことがある。たとえば、二人の文脈においてしか有意味ではない目標を夫婦で持つことがあり、夫婦はそのような目標の中でお互いの情動を調整することができる。そして四つ目は個人差の存在である。たとえば、女性は社会的交流が活動的であり、情動を投資する傾向にあると示されている (Moen, 2001)。このような個人差は夫婦の相互作用においてより影響を受けやすいかもしれない。また夫婦関係を扱う上では、文化やコホート、社会経済的要因についても同様に考慮する必要があると指摘している。この枠組みは、高齢期の夫婦の特徴を示しており、夫婦間の相互作用を捉える上で非常に示唆に富んだ有用な視点と考えられる。

IV 日本における高齢夫婦研究の概要

わが国において高齢夫婦を対象とした研究はわずかであるが、中年期までの夫婦を対象とした研究は発達心理学的研究において報告されている (永久, 2010; 藪垣, 2009)。それらの多くの研究は、Erikson (1950) の生涯発達理論が示す「アイデンティティ」や「親密性」という発達課題を理論的基盤としている (岡本, 2004)。一方、高齢夫婦に関連する知見は、ソーシャル・サポート研究で報告されている。高齢期における配偶者は主要なサポート提供者であり、男性は女性に比べてサポート資源が配偶者に集中する傾向にあることが示されている (小林・杉原・深谷・秋山, 2005)。そして、配偶者を含むソーシャル・サポートの存在は、心理的 well-being だけでなく身体的健康や死亡率など多様なアウトカムとも関連することが報告されている (杉澤, 1994)。しかし、ソーシャル・サポート研究では高齢期における配偶者の機能的役割については言及されているが、サポートを必要としている個人や、サポートの交換自体が重視されるため (周・深田, 2011)、高齢夫婦の体系だった知見はほとんど見当たらない。

そして、介護研究においても介護者が配偶者である場合の介護状況などの特徴を示す研究が報告されている。杉浦・伊藤・九津見・三上 (2010) は、性差によっても介護ストレスに関連する要因や、利用するサポートの種類が異なることを示し、性差を考慮した援助の展開の必要性を主張している。林 (2005) は、夫が要介護になった際の妻の介護役割受入プロセスについてグランウンデッド・セオリー・アプローチを用いて検討している。その結果、過去の夫婦関係を見直し、現在の夫婦関係を再構築する過程を示した。今後日本では配偶者間の介護は増加すると予測され、続柄や性別といった属性に着目した研究や、介護役割の受入や介護負担感の緩衝を目指した知見が報告されることは必然ともいえる。

また、わずかであるが高齢夫婦のペアデータを用いた研究も報告されている。片桐・菅原

(2007) は、定年退職者の社会参加活動と夫婦関係について検証した。その結果、60歳代後半の夫が就業者の場合は妻の生活満足度が高く、夫が非就業者のときは夫が社会参加活動しているほうが妻の生活満足度は高くなることが明らかとなった。この研究は、夫婦の主観的満足感を捉えるためには本人の要因だけでなく配偶者の要因を考慮する必要性を示唆している。

V 日本における高齢夫婦研究の課題と展望

ここまで、夫婦間の精神的健康および認知機能を扱った海外研究および日本で報告されている高齢夫婦に関する研究について概観した。これらの研究から、海外研究とわが国の研究にどのような課題があるか整理し、今後の展望について述べる。

本報で紹介した海外研究では大きく二つの現象について検討されていた。一つは、夫婦間の相互作用を通して、精神的健康や認知機能が夫婦で類似することである。この現象については一貫した結果が報告されており、妥当な理論も提案されていた。二つ目は、夫婦間で精神的健康と認知機能が影響することである。夫婦間で精神的健康と認知機能が同領域に相互に影響するか、精神的健康が領域を横断して認知機能に影響するかは、研究数が少ない限界もあるが、一貫した結果は得られていなかった。この理由として、性別、親密性や夫婦関係の質といった要因の影響が指摘されていた。領域を横断して夫婦間で影響がみられるかについては各要因の変化の程度が小さい場合には見られない可能性が指摘されていたことから (Lee et al., 2011)、対象とする年齢や期間を考慮することが課題と考えられる。また、これらの研究では夫婦の相互作用による結果に注目が集まり、前提となる相互作用については検討しきれていない点が問題として考えられる。社会文脈的視点として配偶者の要因に着目することは適切と考えられるが、夫婦間でどのような相互作用があり、それがどのような結果をもたらすか基礎的な知見を積み重ねる必要もあるだろう。たとえば、夫婦の相互作用を直接扱った研究として、二人一組で行う認知課題成績をアウトカムとした Collaborative Cognition Paradigm と呼ばれている研究領域がある (Strough & Margrett, 2002)。日常場面における認知的な課題は協同で行うことが多いことから、夫婦がどのように認知資源を配分し認知的な課題を行っているか理解する上でこの研究パラダイムは有用である。これまで、協同で課題を行うことで、物語再生の増加、虚偽記憶の低下が報告されている (Dixon & Gould, 1998; Ross, Spencer, Blats, & Restorick, 2008)。さらに、Margrett & Marsiske (2002) は、配偶者と課題を行った方が無関係の高齢者と課題を行った時よりも成績が良く、協同作業に対する自分と相手の主観的な評価がその協同成績を予測することを示している。Berg, Johnson, Meegan, & Strough (2003) は、協同で認知課題に取り組む間の会話プロセスの中で相手と情動を交換する程度を評価し、情動交換が多いほど課題の特性に適した方略を用いたと報告した。これらの結果は、夫婦の相互作用によってもたらされる結果について考える上で示唆に富む知見である。このようなアプローチを用いた結果を統合し、包括的に高齢夫婦の相互作用について理解していく必要があるだろう。

わが国においては、サポート研究や介護研究など各研究領域のテーマが重視され、本報で取り上げた海外研究のトピックを扱った研究は見当たらない。片桐・菅原 (2007) が示す通り、

配偶者の要因が本人の主観的満足感に影響することを踏まえると、わが国においても本人の精神的健康や認知機能に配偶者の要因が関連することが予測される。しかし、文化的背景によって夫婦関係のあり方は異なると指摘されている (Hoppmann & Gerstorf, 2009)。わが国の高齢夫婦の関係性や相互作用の特徴を考慮した日本独自の理論を視野に入れた研究が必要となるだろう。また、配偶者の精神的健康の悪さや認知機能の低さが影響しない夫婦の相互作用の特徴を捉えることも、高齢夫婦の生活を考える上で有用な知見となるだろう。高齢期はさまざまな機能が低下しやすいため、そのような配偶者の変化に対してどのように適応していくのか明らかにすることも必要であろう。

また、本報では研究方法について詳しく触れなかったが、夫婦研究ではペアデータを扱うことは大前提となる。ペアデータは、重回帰分析や分散分析では適切な分析を行うことができないため、ペアデータを有効に分析する必要がある。統計手法の発達から、さまざまなペアを対象とした研究が日本でも報告されはじめており、高齢夫婦のペアデータを用いた研究の発展が期待される。

本報では、高齢夫婦の精神的健康と認知機能を扱った海外研究とわが国における高齢夫婦研究を概観し課題についてまとめた。今後、高齢夫婦のライフスタイルを考える上でも高齢夫婦の研究は重要な研究課題となるだろう。高齢期の加齢変化には様々な要因が関連することは多くの研究によって示されているが、他者の要因を考慮した研究は海外においても少ない。これまでの高齢夫婦に関する知見を統合し、高齢夫婦の相互作用がもたらす影響について明らかにすることが高齢期をより一層理解することにつながるだろう。

引用文献

- Baltes, M. M. & Carstensen, L. L. 1999 Social-psychological theories and their applications to aging: from individual to collective. In S. W. Klaus & B. L. Vern (Eds.), *Handbook of theories of aging*. (pp.209-232). New York: Springer Publishing.
- Berg, C. A., Johnson, M. M. S., Meegan, S. P., & Strough, J. 2003 Collaborative problem-solving interactions in young and old married couples. *Discourse Processes*, **35**, 33-58.
- Carstensen, L. L. 1991 Selectivity theory: Social activity in life-span context. In K. W. Shaie, & M. P. Lawton (Eds.), *Annual review of gerontology and geriatrics*. 11. (pp. 195-217). New York: Springer.
- Dixon, R. A. & Gould, O. N. 1998 Younger and older adults collaborating on retelling everyday stories. *Applied Developmental Science*, **2**, 160-171.
- Eagles, J. M., Walker, L. G., Blackwood, G. W., Beattie, J. A., & Restall, D. B. 1987 The mental health of elderly couples. II. Concordance for psychiatric morbidity in spouses. *The British Journal of Psychiatry*, **150**, 303-308.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: W. W. Norton (仁科弥生訳 1977・1980 幼児期と社会 1・2 みすず書房)
- Gerstorf, D., Hoppmann, C. A., Anstey, K. J., & Luszcz, M. A. 2009 Dynamic links of

- cognitive functioning among married couples: Longitudinal evidence from the Australian Longitudinal Study of Ageing. *Psychology and Aging*, **24**, 296-309.
- Gerstorf, D., Hoppmann, C. A., Kadlec, K. M., & McArdle, J. J. 2009 Memory and depressive symptoms are dynamically linked among married couples: Longitudinal evidence from the AHEAD study. *Developmental Psychology*, **45**, 1595-1610.
- Gruber-Baldini, A. L., Schaie, K.W., & Willis, S.L. 1995 Similarity in married couples: a longitudinal study of mental abilities and rigidity-flexibility. *Journal of Personality and Social Psychology*. **69**, 191-203.
- 林 葉子 2005 夫を在宅で介護する妻の介護役割受け入れプロセスにおける夫婦関係の変容：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる 33 事例の分析 老年社会科学、**27**, 43-54.
- Hatfield, E., Cacioppo, J. & Rapson, R. L. 1993 Emotional contagion. *Current Directions in Psychological Science*, **2**, 96-100.

- 内閣府 2011 高齢社会白書（平成 22 年版）http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/22pdf_index.html（閲覧日：2011 年 8 月 30 日）
- 永久ひさ子 2010 成人期・老年期における発達研究の動向（発達部門（成人・老人），II わが国の最近 1 年間における教育心理学の研究動向と展望）教育心理学年報，**49**, 67-76.
- 岡本祐子 2004 成人期・老年期における発達の研究の動向と展望（わが国の最近 1 年間における教育心理学の研究動向と展望：発達部門（成人・老人））教育心理学年報 **43**, 58-67.
- Peek, M. K., Stimpson, J. P., Townsend, A. L., & Markides, K. S. 2006 Well-being in older Mexican American spouses. *Gerontologist*, **46**, 258-265
- Ross, M., Spencer, S. J., Blatz, C. W., & Restorick, E. 2008 Collaboration reduces the frequency of false memories in older and younger adults. *Psychology and Aging*, **23**, 85-92.
- 周 玉慧・深田博己 2011 夫婦間サポート獲得方略の使用類型がサポート受け取りと結婚の質に及ぼす影響 心理学研究, **82**, 231-239.
- Strawbridge, W. J., Wallhagen, M. I., & Shema, S. J. 2010 Spousal interrelations in self-reports of cognition in the context of marital problems. *Gerontology*, **57**, 148-152.
- Strough, J. & Margrett, J. 2002 Overview of the special section on collaborative cognition in later adulthood. *The International Society for the Study of Behavioural Development*, **26**, 2-5.
- 杉浦圭子・伊藤美樹子・九津見雅美・三上 洋 2010 在宅介護継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討 日本公衆衛生雑誌, **57**, 3-16.
- 杉澤秀博 1994 高齢者における社会的統合と生命予後との関係 日本公衆衛生雑誌, **41**, 131-139.
- Tower, R. B. & Kasl, S. V. 1995 Depressive symptoms across older spouses and the moderating effect of marital closeness. *Psychology and Aging*, **10**, 625-638.
- Tower, R. B. & Kasl, S. V. 1996 Depressive symptoms across older spouses: Longitudinal influences. *Psychology and Aging*, **11**, 683-697.
- Tower, R. B., Kasl, S.V., & Moritz, D. J. 1997 The influence of spouse cognitive impairment on respondents' depressive symptoms: the moderating role of marital closeness. *Journal Gerontological B Psychol Sci Soc Sci*, **52**, S270-278.
- Townsend, A. L., Miller, B., & Guo, S. 2001 Depressive symptomatology in middle-aged and older married couples: a dyadic analysis. *Journal Gerontol B Psychol Sci Soc Sci*, **56** S352-364.
- 藪垣 将 2009 中年期夫婦関係研究の展望 - システムズ・アプローチの観点から 東京大学大学院教育学研究科紀要, **49**, 307-316.